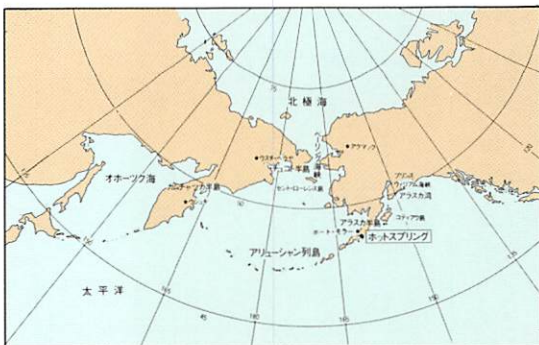




北アメリカのアラスカ半島は、イヌイトとアリユートが暮らしてきた地域です。

この半島の中央部、ベーリング海側に位置するホットスプリング遺跡では、日本の人類学者、考古学者らによって発掘調査が行なわれました。遺跡は貝塚を含む大規模な集落跡で、イヌイトあるいはアリユートの祖先が残したものと考えられています。自然の恵みを巧みに利用しながら、厳しい環境に適応してきた人びとの生活と文化を明らかにする遺跡です。



本特別展では発掘後、研究のために調査者が保管しているホットスプリング遺跡の石器や骨角器などの出土遺物と調査時の写真、図面記録、映像をとおして、アラスカ半島の先史文化を紹介します。

本特別展は、調査の代表である岡田宏明氏（北海道大学教授）、岡田淳子氏（北海道東海大学教授）のご厚意とご協力によるものです。

第6回特別展

北緯55度

アラスカ半島の先史文化

1993. 4. 27(火) - 6. 3(木)

特別展観覧料（かっこ内は10人以上の団体の場合）

一般 250(200)円 高校生・大学生 80(50)円 小学生・中学生 50(30)円



北海道立北方民族博物館
Hokkaido Museum of Northern Peoples

〒093 北海道網走市字潮見313-1 ☎0152-45-3888



◆アラスカ半島。ツンドラの大地に人びとが住みついたのはいまから5,500年前ころで、以来600年前まで断続的に生活の場として利用された。その結果残された生活の証しは、60,000平方メートルに及ぶ貝塚と250カ所を越える^{あか}縦穴住居跡など。これがホットスプリング遺跡である。

◆貝塚は当時の人びとの食生活を物語る。ここではアザラシ、オットセイ、クジラ、カリブー、キツネ、クマ、サケ、オヒョウなどの骨や多くの種類の貝殻がみられた。海と陸上の自然の恵みは、石や動物の骨や角から作り出されたさまざまな道具によって獲得することができた。弓矢^{やり}、槍^{もり}、銛^{せきすい}、ヤス、釣針、石錘などが代表的な道具である。

◆ここで食糧を得ていた人びとは住居を構えた。地面を掘り下げて床を作り、クジラの骨などを材料にして屋根や壁の骨組みを作った縦穴住居である。石ランプで暖をとる、その明りをたよりに、骨や角で装飾品や生活に必要な道具を作ったり、鳥骨製の針で衣服を仕立てていたのだらう。

◆人びとの暮らしの中に、狩猟動物に対する信仰を表すような行為があったことを思わせる^{こんせう}痕跡もある。いくつものイルカやアザラシなどの頭骨を1カ所に並べることで、豊猟を祝い、獲物の再来を願ったのであろう。動物や人を象った特殊な骨角器が供えられる。

◆海洋と切り離すことのできない生活を示す遺跡はアラスカ半島の他の地域にも点在しているが、とくにホットスプリング遺跡の周辺には、長期間、生活の場として利用される条件が備わっていたと考えられる。



もり 槍先
やり 槍先



動物形の
骨角製品

仮面

